特別支援教育の扉 №２　　令和４年４月１２日発行

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

能代山本地区特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

## 「個別の指導計画」の作成と活用のポイント

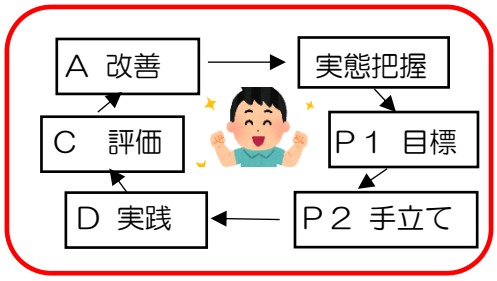
### １　作成のメリット（子どもが変容する　教師の子どもの見方が変わる）

・子どもの的確な実態把握ができる。（生育歴・相談や教育歴・診断歴・検査等）
・指導・支援の方向性が明確になる。（校内で目標・指導や支援内容・成果を共有できる）
・評価の視点が明確になる。（より適切な支援の改善につながる）
・学級全体への相乗効果をもたらす。（個別の配慮は他の子どもにも有効である）
・保護者と信頼関係を構築できる。（思いのカタチのズレを埋められる）
・コーディネーターや担任のスキルアップになる。（ＰＤＣＡサイクルで子どもの変容を実感できる）
・関係機関との連携が強化される。（情報を共有して役割分担ができる）
・引継ぎ資料となる。（途切れない一貫した指導が継続できる）

※作成対象児～特別支援学級に在籍する子ども　通級指導教室を利用している子ども、通常の学級に在籍して特別な教育的支援が必要な子ども

### ２　作成の流れ（ＰＤＣＡサイクル）

①実態把握（発達の状態、検査結果　本人や保護者の願いの聞き取り）
↓
②指導計画（Ｐｌａｎ）１ 目標設定　　２ 手立て（支援内容や方法）
↓
③実　　践（Ｄｏ）　計画に基づく実践
↓
④記録・評価（Ｃｈｅｃｋ）子どもの変容・目標や手立ての評価
↓
⑤改　　善（Ａｃｔｏｉｎ）目標や手立ての改善




### ３　目標設定について（目標が曖昧になると、指導も評価も全て曖昧になる）

①長期（年間）・短期（学期）目標の設定　※緊急性が高い場合は２週間～１か月スパンの目標にする
・「個別の支援計画」→長期目標→短期目標→単元・題材目標→本時の目標へとつなげる。
②子ども主体で肯定的な目標
・「友達をたたかない」→「自分の意思を言葉で伝える」
③達成可能で具体的な目標
・「４５分間離席しないで授業を受ける」→「１０分間は着席して自分の課題に取り組む」
④客観的な観察・評価ができる目標（複数の人が評価ができる目標）
・「きちんと挨拶をする」→「相手の顔を見て『おはようございます』と挨拶をする」
⑤目標の焦点化
・短期目標は、優先順位を付けて一つか二つに絞る。
⑥子ども自身の目標の意識化
・子どもが主体的に活動できる目標を設定する。（心の扉を開けるのは、子ども自身である）

## ４　手立てについて（２回やってうまくいかなければ別の方法を考える）

①子ども一人一人の発達段階や特性に即した手立ての設定
・マニュアルを越えたところに、個に応じた有効な支援がある。
②個別の配慮と同時に、学級全体への配慮の提供
・個別の配慮→「刺激の少ない座席にする」「相性のよい子どもを隣の席にする」
・学級全体への配慮→「黒板付近の掲示物を減らす」「教室内外の音を徹底的に減らす」
③明確な評価ができるような具体的な手立ての設定
・「行き先」を見せて、担任の許可を得てからタイムアウトをする。
④多様な支援内容・方法の提供と支援を減らす工夫
・たくさんのスモールゴールを設定して、最終ゴールに到達できるようにする。

例：靴下を履く

| | |
|---|---|
| １　靴下のかかとを下に向ける | ２　両手で靴下のゴムの部分を持つ |
| ３　靴下につま先を入れる | ４　靴下にかかとを入れる |
| ５　かかとからくるぶしまで引き上げる | ６　靴下のゴムを最後まで引き上げる |

慣れない行動を確実に定着させたい場合は、１から順番に指導する順行性チェイニングの方法を、達成感や成功経験を身に付けさせたい場合は、６から指導する逆行チェイニングの方法が有効です。

例：お店で支払いをする

１　「何をするのかな？」（間接言語）　　２　「レジへ行くんだよ」（直接言語）
３　指さしながら「レジへ行くんだよ」（直接言語＋動作）
４　「レジへ行くんだよ」と言ってその方向を指さして身体的に誘導する（直接言語＋指さし＋身体的ガイダンス）

子どもが一人でできるように、視覚支援（写真・絵カード・手順カード等）を活用するとともに、支援をフェイドアウトします。子どもが最小支援で最大の力を発揮することを目指します。

## ５　評価について（指導は子どもに始まり、子どもに戻る）

①達成基準を基に、複数の教師による評価（校内支援委員会や個別のケース会議を活用）
・行動を時間・回数・頻度等、細かく数値化する。（評価とは計測できること、誰が見ても分かること）
②変容した背景・理由の評価
・なぜ変容したのか、成果と課題を具体的に分析する。
③保護者、学校（職員、校内支援体制等）の評価
・子どもの変容に加えて、校内支援体制や職員の意識を評価する。
・保護者や関係機関とうまくいった実践を共有する。

④次の授業への反映、次の学期、次年度の課題と目標及び手立ての検討
・目標が達成できない場合は、目標設定の水準を下げたり、手立てを変更したりする。
・次年度の引継ぎ資料として活用する。（担当者が変わっても支援が継続できるようにする）

子どもの変容を基に、目標や手立てを定期的（９月・３月）に評価し、指導の改善につなげます。評価とは「一度立ち止まり、スタートラインに立つ」ことです。一と止の間をつなぐことが「正」しい評価になります。そして、立ち止まって改善し、少しずつ前に進むことが確かな「一歩」となります。

## ６　特別支援学級、通級指導教室について

・特別支援学級の「個別の指導計画」は、全ての教科等にわたって目標や支援内容・方法を立案します。
**※特別支援学級新担任の手引き（改訂版）平成 29 年4月秋田県総合教育センターを参照**
・通級指導教室においては、通級指導教室の担当者が、学級担任と連携しながら、教科の補充ではなく、各教科等を学ぶ際の目標を達成するときの困難さにアプローチするために、「自立活動」の内容を計画します。

「個別の指導計画」を活用することで、子どものつまずきに気付き、それを改善するための目標や手立てを明確にして全職員で指導・支援に当たることができます。また、よい実践を思い出ではなく、ノウハウにすることができます。担任（運転手）が本人や保護者の願い（燃料）を乗せて走るためには、メンテナンスを行う校内支援委員会（エンジン）が機能し、道に迷わない「個別の指導計画」等（カーナビ）が必要です。そして、止まりそうになったときは、校内の特別支援教育コーディネーター（整備士）が修理しながら、ゴールを目指します。**学校の最高の成果は、「子どもの成長と笑顔」**です。